



Title	大学の海外派遣プログラム担当者としてのリスク管理
Author(s)	齋藤, 百合子
Citation	GLCOLブックレット. 2014, 13, p. 65-67
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/50041
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka



【第2章】

海外派遣支援団体の 経験から



2-4

大学の海外派遣プログラム担当者としてのリスク管理

齋藤百合子

明治学院大学国際学部准教授
大学教育における「海外体験学習」研究会 (JOELN) 所属

「大学教育における『海外体験学習』研究会」(以下、JOELN)は、2003年にタイ北部の都市チェンマイのバヤップ大学でサービスマーケティングに関する世界大会に参加した国際基督教大学、中央大学、桃山学院大学、恵泉女学園大学の海外に学生を派遣するプログラムの担当者らと、後に大阪女学院大学の担当者も加わって2004年に発足した。学生を海外に引率・派遣する大学の主に単位化されたプログラムに関する情報や経験の交流と、教育の質の向上を目的としている。JOELN発足当初から、安全管理やその体制に関する関心は高かった。JOELN初代会長の大橋正明(恵泉女学園大学)は、「学生の親など保証人は大学のプログラムということで大学を信頼して子を海外に送り出しているが、事故が発生したときに大学の安全管理・危機管理の不備が露呈すれば大学全体の信頼が損なわれる恐れがある」と、当時、恵泉女学園大学で、他大学や危機管理会社、旅行代理店、保険会社など関係者らや、スタディツアー帰国後に腸チフスが集団発症して対応に迫られたNPOなどの協力で構築した安全管理・危機管理の経験や知見を積極的に共有した⁴。またJOELN年次大会では毎年危機管理に関する分科会を開催している。ある年の分科会での議論を契機に旅行代理店マイチケットは独自のリスク管理セミナーを毎年開催するようになった。

JOELNの分科会や交流会、また基調講演などで提示された事例、たとえば旅行中、同行した学生と仲違いをしたため持っていた睡眠薬を大量に服用、ひとりで行動して数日間の行方不明、集団行動のストレスで突発性難聴の発症、引率教員の病気発症による学生引率の影響、帰国

4 JOELNが開催する年次研究大会で安全管理・危機管理の分科会を毎年設けている。2005年の年次大会の基調講演は危機管理会社担当者を招いた。また恵泉女学園大学は2007年に「大学教育における海外体験学習の可能性と課題ー危機管理事例を中心に」をまとめた。

後の体調不良がマラリアに起因するものと診断されず死亡など、どれも「本学でもありえるかもしれない」と思えるものであった。こうした事例やそれらの対応の共有をすることで、多少なりともリスクに備える必要性や、対応の実践例を学ぶことができた。しかし、「事故」として取り扱われるこれらの事例は、公に学外者と共有することが実は極めて難しい。事例や大学の固有名詞を出さずに、事例としてその対応等を学びあえた場は大変貴重であると言えるだろう。近年のJOELNの安全管理・危機管理に関する分科会での議論は、どのようにリスクを防止するか、リスクに対応する学内体制をどのように構築するか、にシフトしつつある。リスク管理には、リスクの防止とリスクが発生してからへの対応があるが、その両方が統合されたリスク管理の事例検討・研究が今後ますます必要とされるだろう。

ここで筆者が遭遇した事故の経験からリスク管理を考えてみたい。筆者は東南アジアの山地に住むある民族の村に学生を引率して向かう途中、村の入口に向かう上り道で車がエンストし、そのままゆっくり後退し、道の曲がり角で横転した。横転した時の衝撃は、抱えていた生卵は割れない程度だった。また村に届ける古着が衝撃を吸収したが、参加学生にとっては言葉や習俗がわからない未知の世界での予期しない出来事で、体が投げ出され、一部の学生は頭部を打ったことに衝撃を受けた。その後、病院に搬送して医師の診察やCT撮影などの診察をおこなった。当然、大学への報告、連絡も同時に行ったが、緊急連絡網が整備されていたにもかかわらず、事故が発生したのが週末の日本時間の夜間だったからか、緊急連絡網の携帯電話等が通じないところもあった。筆者は、現場で医者および病院との診察や入院の可否、保険、支払い等の手続きや連絡、現状説明を含めた学生の対応などさまざまな対応に忙殺されていたが、その間に大学関係者教職員複数名から現状報告を求める国際電話が複数回入ったことが忙殺に拍車をかけた。

幸い、診察の結果、怪我は軽傷で入院の必要もなかったが、大学の判断によりプログラムは即時中止して帰国となった。成田空港に到着してすぐに日本の医療機関でも検査を施したが大事に至らなかった。

この事例では、緊急連絡網の順番にこだわらず連絡がとれたところに連絡し、連絡を受けた人は臨機応変に連絡網を回すこと、また大学から現地、現地(学生を含む)から大学や学生の家族への連絡窓口を一本化すること、可能ならば対応可能な人を即時派遣することが求められた。また、引率者は引率業務を全うすることができたが、場合によっては引率者が機能しなくなる可能性もあった。その場合はまた違う対応が求められるだ

ろう。

どんなにリスク防止に対策をしても、100%のリスクを防げるものではない。発生してしまうリスク、事故はあるだろう。大事なのは、リスク防止対策とともに、リスクが発生したときにどれだけリスクを軽減させるかと迅速な初動対応だと考える。